

さつまいもを切り、火で焼き、白砂糖で作ったタレをつけたものである。

しかし、値段は高い、生芋の四分の一にへり、手間もかかる、反面、川越イモの原形がとどめられ腐敗しないことである。

川越の商店先にはどこでも売っている。

(2) つばやき（平本さん）

大型のカマドに土でつくったツボで焼く本格的なものである。

つばのまわりに、針金でカギにかけ“ジワジワ”とむし焼きにする、三十分はかかる。

10月下旬から翌年4月頃まで定休日なしの店が松江町にある。

(3) きんとん用さつまいも

紅赤いもできんとんを作るときは、太いイモで作るのがコツである。澱粉も多く、味も良く、手間も少なくてよい、市場へ売れば規格外で安値になる。従って中位のものより安くすむので、昔から太いものをきんとん用と云う老人もある。

手作りきんとんでの使用をすすめたい。

(4) さつまいもの料理店

料亭、食堂等板前さんの工夫による料理がたのしめる「いも膳」等良い例である。

畑作地の料理の一つである。川越でなくてはできない店であろう。（昭和甘藷百珍）

川越いも研究会で発行している書籍

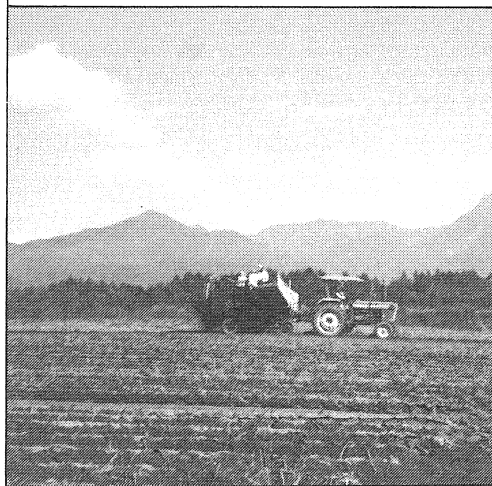
- ① サツマイモの話 井上 浩 著
② 昭和甘藷百珍 川越いもの友の会編
③ 川越いもの歴史 川越いも研究会
発行所 ①②は 川越市石原町1丁目2-1
たなか屋出版部
(3)は 川越市幸町7-9 桜井印刷所

田口重雄氏

川口農業改良普及所・北部地区普及課長。
昭和5年6月18日生れて、昭和27年埼玉県農業改良普及員として奉職。昭和54年より川越農業改良普及所勤務。北部地区（川越市）を担当、地域農業の振興と技術、経営の改善普及に従事。

農場めぐり

八岳馬鈴しょ原原種農場



八岳馬鈴しょ原原種農場 原種部長 宮澤輝俊

健全無病な馬鈴しょ原原種の生産供給による、我が国馬鈴しょ栽培の安定向上を目的として、昭和22年に全国に7ヵ所（昭和39年に二期作用農場が長崎県に設置され8ヵ所）の国の原原種農場が設置され、当场もその一環として昭和22年に設立された。

馬鈴しょ原原種農場は、無病種いも生産という特殊な使命を持つことから一般の農地から隔離されている必要があり、いずれも僻地に設けられている。当场は長野県茅野市のハヶ岳西麓にあって、約1万haに亘って展開する広大な高原の一角を占め、海拔1280～1,430mの間に所在する。あたり一帯は、ハヶ岳中信国定公園の指定をうけ、東に赤岳を主峰とする秀麗なハヶ岳連峰を仰ぎ、西に諏訪盆地、遠くに槍岳、穂高の峻険を、南に南アルプス・甲斐駒岳、北に端正なたたずまいの蓼科山、霧ヶ峰高原を望む風光明媚な地であ

る。

農場用地は西に面した3~5°の傾斜地で、数条の浅い沢が東西に走り、松、雑木林の中には場が開かれている。気候は年平均気温が7°Cで盛夏といえども30°Cを超えることは稀であって、天然の冷房は快適であり、農場周辺は近年別荘地等観光開発が盛んである。しかし、冬の自然環境は厳しく、-20°Cを超えることも間々あり、地下50~60cmも凍結し、冬ごもりを余儀なくされる。

このような夏期冷涼の気候条件は馬鈴しょの生産にすこぶる好適であり、かつウィルス病を媒介するアブラムシの発生回避及び保毒株における病徴の早期発見が容易であるなど馬鈴しょ採種栽培には天恵豊かな土地である。土壌は軽しような火山灰土壌で腐植に富んでいるが、埋石多くせき薄で、傾斜による土壌流亡も多く、酸性の強い低位生産土壌である。

耕地は74haで、4年輪作により馬鈴しょを18ha栽培している。馬鈴しょの総生産量は、480トンで、この中、原原種として出荷されるものは350トン程度である。当場で栽培する品種は男爵薯など6品種で、群馬県以西の採種県に配付している。特に近年は長崎県をはじめとする二期作地帯の伸展が目ざましく、従って二期作用品種（デジマ、ニシユタカ、農林一号）の作付が増加している。

原原種農場内における増殖体系は、まずウィルス・フリーにするための組織培養が行われ、これにより無毒化された種いもを保護網室（0.04ha）→基本ほⅠ（0.3ha）→基本ほⅡ（1.7ha）→原原種ほ（16ha）と体系的に増殖する。

この間種いもの品質にもっとも影響する各

種ウィルス病、輪腐病等の検定淘汰、病害虫の感染や侵入防止のための各種の検定、防除策が実施されている。ウィルス病は採種栽培上もっとも重要な病害であり、原原種生産の各段階で指標植物への接種検定、抗血清を用いた血清検定、直接ウィルス粒子を観察する電子顕微鏡検定などの技術を用いてウィルス感染株の検出と除去を行っている。近年は更に微量ウィルスの検出が可能で精度の高いラテックス法やエライザ法などによる検定も試みられている。

また細菌病で開場当時全国に蔓延し多大な被害を生じた輪腐病についてはグラム染色法による検定で撲滅が図られてきており、黒あし病についてはトリガルスキー培地等を利用して検出し、防除を行っている。

網室、基本ほⅠで生産された種いもは冬期間温室を利用した個別検定が行われる。この検定法は種いもの一芽をとり、温室に植えて健病を判定するもので、秋から春にかけて約3万個について行われる。

夏期栽培中においては病株抜取が検定の主要な作業となるが、網室、基本ほについては接種検定なども実施され、病株が除去される。抜取は6月中旬より8月下旬に至る間に職員が毎日ほ場を巡回してウィルス病をはじめその他病障害株の除去を行っている。

ほ場での種いもの植付は1つのいもの切片を隣り合せて植付ける塊茎単位栽植が行われ、伝染源の散逸防止と病株検出に効果をあげている。馬鈴しょのウィルス病は殆んどものがアブラムシによって伝播されるので、これの防止には浸透移行性のある土壤施用殺虫剤を使用し、6月中旬以降は茎葉に殺虫剤散布を行い、更に生育後期の感染防止策とし

て茎葉処理（枯凋剤）を行っている。また接触伝染性のウィルス病については無毒化された種いもの体系的増殖と接触防止に努め、その結果近年では無病化された原原種が生産されるようになった。

この他、新病害虫の農場への侵入防止策として、馬鈴しょをはじめナス科植物の持込みを禁止し、土砂についてはジャガイモシストセンチュウの検査、ほ場への立入禁止など侵入防止に努めている。また品種需要に即応するため挿木などによる急速増殖も試みている。農場での作物栽培は4年輪作で行われ、馬鈴しょのほか大豆、そば、エン麦、ライ麦、牧草が作られ、大豆、そばは災害対策用雑穀種子として翌年8月まで予備貯蔵されている。本年からは新たに農林水産省あげて取り組むこととなった遺伝資源保存増殖事業（農林水産ゾーンバンク）の一端を担う事業が開始される。

農場の組織は、原種部、経営部、庶務課の2部1課で、職員35名により運営されている。川北寿彦場長は初代久保佐土美場長から数えて7代目であり、先輩諸氏が汗にまみれて築きあげてきた農場をより発展させ、より良い品質の原原種を生産供給すべく職員とともに取り組んでいる。

開場当時は人力が主であった農場作業も、人力から畜力へ、畜力から機械力へと変遷し、一部の作業を除き機械化され、特に大型農機具のポテトハーベスタ、コンバインの導入は労働の軽減、省力に大きく役立っている。建物も木造から大型鉄骨化され、穀物乾燥収納施設も改善されるなど年々施設も拡充整備されている。

しかしこのように発展充実した農場も今日



に至る道程は決して容易なものではなく、やはり40年の歴史が積み重ねられた結果である。今農場を訪れる人々がまず驚かれるのは、大きな門標と清著源流の石碑、ロータリー、池泉に配された巨石である。ここに見られる大小さまざまな石は、埋石多く土壌流亡が激しく生産力の低かった当場の生産力向上が計画され、数年を費して行われた埋石の除去、暗渠排水などは場整備の所産である。ほ場整備事業の完成、庁舎落成を期に当時の農林大臣倉石忠雄氏、故日本種馬鈴しょ協会長大山謙吉氏揮毫による門標、石碑が立てられ、更には場周辺に搬出山積された巨石の中より森田場長自ら石を選び厳寒期の雪を利用して運び集めて、ロータリー、京都名刹の庭園を参考にして池が設計されるなど寒風の中場長陣頭指揮の下職員の力によって庭園が造られた。庭園に配された石、松、その他樹木に至るまで職員の努力の賜で、当地赤肌の巨石も10有余年を経て苔むし、老松も所を得て滝の水音もさやかに疲れをいやしてくれる。農場の誇りと使命を掲げ職員を督励している清著源流の碑、60年に一度巡りくる庚申の年

に由来する庚申塚も農場の限りなき発展と職員の幸福を願って立てられ、また安永前場長が筆をとり、自ら職員と共に精魂こめて刻まれた八岳農場をうたった歌碑も、庭園を築いた職員の心が脈々と受け継がれた結果であろう。

人里を離れること6km、農場から茅野市内に至る道路は、通称御柱道と呼ばれ、全国に名高く三奇祭の一つに数えられる諏訪大社御柱祭（樫の巨木を八岳山中より曳行し境内に立てる）が6年に一度行われる時以外は人の往来もなく、時に山麓の人々が草刈り薪とりの牛馬車が利用するだけの山道であった。このため雨後春秋は泥ねい膝を没する悪路で、朝用務ででかけた車も夜道路の凍結を待たねば帰場できない状態であった。従って、春秋の道路修理は三場（八岳中央農業経営伝習農場、関東東山農試高冷地支場及び当場）の年中行事として行われ、ここにもは場から搬出された石が敷きつめられ、場長を先頭に実施した先輩諸氏の汗と労苦が基礎となり、更にたび重なる陳情によって舗装され現在の道路に変身したものである。しかし、この道路には忘れることのできない内藤等経営部長の悲しいお別れがあった。昭和39年3月30日恒例の道路修理中のことで、行年40才、ここに記してご冥福を祈る次第である。

舗装道路の完成、時あたかも高度経済成長、一億総レジャーの波は、この快適な自然環境を見逃すはずはなく、今や農場周辺は都会人のレクリエーションの場となり、別荘、日本一のペンション村、ゴルフ場、スキー場、テニスコートと開発が進み、環境は大きく変った。休日ともなればこれら施設を訪れる人々の車、八岳登山者を乗せたタクシー、

バスの往来はひきもきらず、夏ともなれば、涼を求めるカラフルな若い男女の散策が目を楽しませてくれるが、空缶の投げ捨て、時には牧草畑をゴルフ練習場に使用する不心得者もでる始末で、無断場内立入りに手をやくこの頃である。

この美しく豊かな自然環境にもう手を入れることは御法度に願いたい。終りに安永前場長が詠み刻んだ歌詩を紹介して筆を置く。

●いや高き八岳 いや広き俎原

ああここにともに力あわせて

清暑源流育てて進む

八岳馬鈴しょ原原種農場

●いや美しき八岳 いや清き柳川

ああここにともに心あわせて

清暑源流まもりてやまぬ

八岳馬鈴しょ原原種農場

原稿募集

いも、澱粉、水飴、化工澱粉等、関連産業に関する原稿を募集します。当財団情報誌に掲載の原稿に対しては薄謝を呈します。400字詰横書で、10枚以上20枚位の範囲で希望します。

送り先・東京都港区赤坂6-10-41

ヴィップ赤坂303号室

財団法人 いも類振興会 情報編集部

いも類振興情報 第4号

昭和60年7月25日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-588-1040
印刷所 交通印刷株式会社